

新収蔵品展 —平成29年度収蔵資料—

前年度の新収蔵資料の数々を一堂にご紹介する毎年恒例の展覧会です。

5/22(火) — 6/24(日)
2018

博物館 企画展示室

一般 500(400)円、高校・大学生 300(240)円、小・中学生 150(120)円

※()内は20人以上の団体料金



三線 与那城型 銘玉城/與那

(平成6年 県指定有形文化財)

沖縄県指定有形文化財20挺の三線の中の一つ。材質はリュウキュウコクタン(上質)で、製作年は明治後期のものと考えられる。首里の玉城御殿に伝来するものといわれ、1921年(大正10年)の三線名評会でハワイ在住の県系人によってハワイに渡ったとされる。戦後、島袋正雄氏が購入した。この度、同氏のカジマヤーの祝いにあたり、所蔵の貴重な三線の贈呈があった。

今回展示される新収蔵品の中でも一番の目玉である県指定有形文化財「三線 与那城型 銘玉城/與那」について当館博物館班長の園原に聞きました。



博物館班長 園原 謙

指定文化財の三線20挺の内の一つとは大変貴重なものですね

はい。琉球政府時代の1955年、名器とされていた三線3挺(「翁長開鐘」「志多伯開鐘」「湧川開鐘」)がいち早く特別重要文化財に、その他の名器8挺も1958年までに重要文化財として指定され、1972年の本土復帰に伴い沖縄県指定有形文化財となりました。1995年にはさらに「与那城型 銘玉城/與那」を含む9挺が追加され、現在では計20挺の三線が工芸品として指定されています。琉球政府時代に、楽器としての三線を美術工芸品として指定したことは特筆すべきことであり、現在でも三線を美術工芸品として文化財に指定しているのは沖縄県だけです。

また、三線には「南風原型」「知念大工型」「久場春殿型」「久葉の骨型」「真壁型」「平仲知念型」「与那城型」と呼ばれている七つの型があり、「久葉の骨型」を除く全ての型の名称が、製作した工人の名前に因んでいます。「与那城型 銘玉城/與那」は与那城さんが祖型をつくったものなのです。

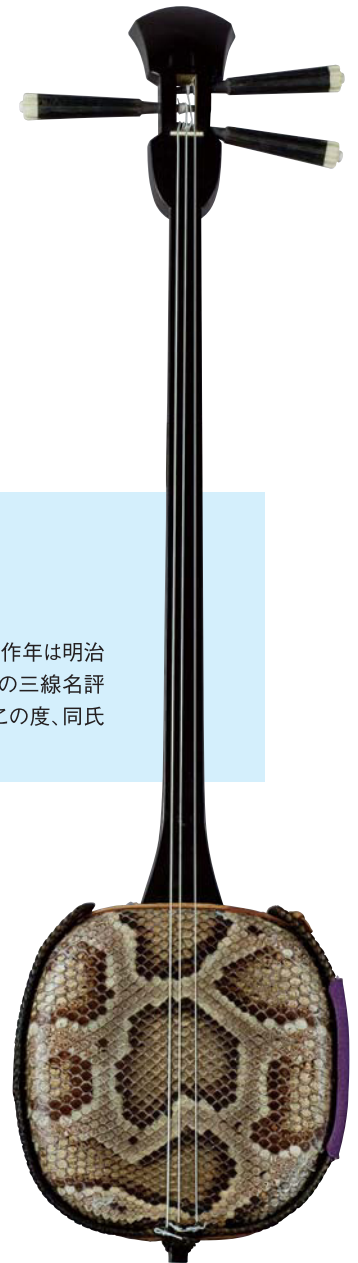
この三線(与那城型 銘玉城/與那)はハワイにも渡っていたのですね

そうですね。「与那城型 銘玉城/與那」の他にも、明治の後期から大正の初めにかけて、首里や那覇の旧家から多くの家宝三線がハワイへ渡りました。1951年の段階で、ハワイには少なくとも5,000挺もの三線が移動していました。それはハワイに移民したウチナーンチュが買い求めたためです。その背景には当時の沖縄の貧しさがありました。旧家の多くが背に腹は代えられないということで家宝の三線を泣く泣く手放したのです。

しかし、もしそのまま沖縄に残っていたら、戦争で焼けていたかもしれません。私はこのことを、文化の伝播であり文化財の疎開だと考えています。戦後、沖縄が豊かになってきてハワイから多くの三線が買い戻されました。

沖縄三線の特徴とは

元々、三線は中国から伝わったが、琉球の三線の形状を中国の三線と比べると2カ所に大きな改変がみられます。棹の長さが1尺ほど短棹になったことと、共鳴具である



胴の直径が一回り大きくなったことです。これらによって、奏でる音程が高くなり、音量が大きくなりました。中国三線はベースのような脇役だったのが、琉球三線は声楽の伴奏楽器として主楽器として躍進しました。その中からよく鳴る三線が誕生することになり、家宝として代々継承されていきました。

最後に三線の名器の鑑賞の仕方や見るべきポイントを教えてください

ズバリ曲線の美! 人間と一緒に形は左右対称ではありません。三線には音を出すための様々な工夫が施されており、その中で生み出された曲線美を鑑賞してほしいです。

沖縄三線は沖縄を代表する楽器であり、世界に誇れる楽器です。ぜひ、本展の中で注目してご覧になってください。